

新たな目標へ

研究開発部 矢口みどり

自然エネルギーへの移行の声が湧き上がる中で、電力供給の30%を占める原発をなくせば、電力不足で産業が停滞し復興への力がなくなってしまうという声も大きい。が、本当にそうなのだろうか。

各家庭に節電が呼びかけられた3月13日以来、我が家では暖房は切り、重ね着し厚い靴下をはいた。2本組の蛍光灯は1本だけつけることにし、昼間はなるべくつけないようにした。トイレ便座の暖房は切りカバーをかけ、使わない電気機器のコードを抜き、その他いくつか節電になるという対策をとってみた。その結果、3月は約半月で2月より71kwh削減できた。1か月分にすれば140kwhでこれは2月の電気使用量の33%分だった。3月は例年になく寒かったので、何もしなければ2月並みに電気は使っていたところだ。

すごい節電対策をしたかのようにだが、実は無理でもなんでもなかった。気密性の高いマンションでは、暖房はしなくても寒さは十分しのげたし、電灯の明るさが半分になっても困ることはなかった。地デジ移行でTVをブラウン管から液晶に変える予定の我が家では、これで夏のピーク時に向けても20~30%削減の見通しがついたが、同時に、これまでいかに電気を安易に使ってきたかということをつくづくと感じた。

より便利な、より快適な、より楽な生活を目標とし、その追及の結果が、今日の産業・経済をつくりあげてきた。

消費者である多くの国民もその中に浸ってきた。しかし、その背景に大きな危険を抱えているとわかった今、それをそのまま進めるわけにはいかない。今がエネルギーの使い方を見直すチャンスではないか。今なら、生活の仕方をも含めて全国民で考えていくことができる。

「時間軸をずらせば、どの企業にも同じ問題がおこる。それに真剣に取り組めば、早くその問題を解決することができるので、かえって運が良かった。」30年程前、高齢化対策に苦慮した企業に対して今は亡き藤田廣一氏（当時慶応大学工学部教授）が語った言葉である。エネルギーの問題は、途上国のレベル向上に伴っていずれ世界的な課題となってくる。その時の手段が原発でよいのか。問題となった時に新たな安全な方向を示せるように、リーダーシップが取れるように今から舵を切っておく。一時的には後退しても、日本人の頭脳と技術力は、エネルギー不足を逆手に取った製品開発の道をきっと切り開いていこうし、また方向を転換することで、新たな視野も開けるはずだ。今年をそのスタートの年にしたい。

JADECニュース83号（2011, 5）より